

平成 24 年度電気工事士実技試験まとめ

第二種電気工事士

前回同様支給されたケーブルの長さに余裕が少なくなっていました。VVF1.6-2Cに関して、概念通りに採寸してしまいますと少々不足してしまいそうな長さでした。

この不安を払拭するには、「ケーブルは支給されたままの端末に配線器具を取り付け、その中心から接続箇所迄の長さ+10cm のところで切断する。」方法で施工して、できるだけ余分なケーブルを含んだ長さで切断しないことが肝要です。

また、渡り線は三心のケーブルが 80cm 支給されていますので、この端末から製作するのが順当と思われます。

第一種電気工事士

第二種電気工事士同様に余分な電線はほとんどありませんでした。

回路の動作が理解できていれば、回路の目的を達成する配線が幾通りもあることが推察できます。

今回のランプレセプタクルを接続する相は、通常接地側相と非接地側相と理解していれば、まず有り得ないのは「赤-黒」の非接地線間に接続することです。(ただし、第一種電気工事士の実技試験では出題の可能性が皆無とは断言できませんが・・・)

残るは「赤-白」もしくは「黒-白」です。これを決定するのは「施工条件」による他ありません。

問題用紙が配られて「始め」の合図で、先ず「材料等」を握った受験者の合格率と「施工条件」を熟読した受験者の合格率の差が今回程顕著に現れた試験は過去に類を觀ませんでした。



今後自習される際に諸版の参考書を参考にされて内容が確実に理解できましたら、「施工条件」をいろいろ工夫されて練習されることをお勧めします。
出来得ることなら、実務経験の豊富な工事士さんにご相談されることを推奨します。